

## 二元論と意識の段階

新田 貴士\*・岡田 朋子\*\*

### Dualism and Level of Consciousness

Takashi NITTA and Tomoko OKADA

#### 概 要

二元論、つまり見るものと見られるものの区別からどの様に意識が決まるかを記号を用いて説明し、意識の4段階を説明した。

#### 序 論

人間の意識についての研究は東洋においても西洋においても永い歴史を持っている。例えば日本では神道において、中国では道教において、インドではヒンドゥーつまりヴェーダーンダやウパニシャッドにおいて深い研究がなされていた。その後インドでより段階的な理論体系が構成された。その流れはアサンガ、ヴァスバンドラ瑜伽行派哲学つまり唯識やナーガールジュナらの中観において一応理論的に完成し、その後の禅などを生む理論的背景となっていく。そしてその禅などは特に日本や中国、ビルマ等のアジア諸国で行われているが、それらは各々の国において古来からの地域的精神文化と融合し、独特の意識へのアプローチを生むようになった。

また西洋においては勿論ギリシャにその源を持つが、近年ではフロイト、ユングらがつくろうとした深層心理の研究がある。特にユングは集合的無意識、共時性を説明した。それらはヨーロッパ、アメリカでさまざまな発展を遂げ、人々の精神的背景に大きな影響を与えている。一方西洋ではデカルトに起源を持つ科学の流れがあってニュートンの力学等を生み、最終的には量子物理学を生んだ。またキルケゴール [K]、ハイデッガー [H]ら哲学者は人間の実存というものを深く考察する

ことにより実存哲学をつくった。以上の西洋の3つの体系は各々一見無関係であるかのように見える。

1977年、現代理論心理学の第一人者である Ken Wilber は著者 “The Spectrum of Consciousness (意識のスペクトル)” でそれら東西の意識の研究を統一的に扱い、我々の意識を5つの段階に分け、それぞれを二元論を用いて自分を何と同一視するかによって説明した ([W])。それを用いて彼はそれぞれの二元論による抑圧、またそれによる投影によって起こるような人間の様々な心理状態を各段階において説明した。つまりそれは東洋的な考え方であり、世界は自分を何と同一視するかで異なって写るといのである。自分を主体と呼び、その主体が見た外の世界の対象を客体と呼んでいる (詳しくは (1.1) で述べる)。

また新たな試みとしては Roger Penrose らの研究がここ最近活発である。彼は “The Emperor’s New Mind” (1989年 [Pe1]) や “Shadows of the Mind” (1994年 [Pe2]) の中で、彼流に人の意識を3つの階層つまりプラトンの世界 (Platonic World)、物理的世界 (Physical World)、精神的世界 (Mental world) に分けた。更に Gödel の理論や量子重力の理論を用いて意識を説明している。

さて我々はまず “二元論” を説明した (1.1)。つまり意識の “元” という概念が主、客の分離から出ることを記号を用いて説明した。更に二元論とは異なる概念、宇宙の要素をまとめたものを意識の “元” とすることを association と呼んだ (1.2)。それら2つの概念を用いて、我々は意識を Ken Wilber にほぼ従って4つの段階に分けその意識の各段階を記号を用いて説明しそれらの間の関連を記した。簡単に述べると、まず二元論の入っていない宇宙 A があり、そこに3つの二元論を入

\* 三重大学教育学部

\*\* 名古屋大学大学院多元数理科学研究科

れることを考える。二元論というのは本来分けられていない宇宙に主体と客体、見るものと見られるものという“区別”を入れることである。このことによって自己をその主体つまり見るものと同一視し、はじめてその主体は外の世界を観察することができるのである。そのときその主体が違えば、当然外の世界も異なって写って見えるだろう。

以下で我々が扱う3つの二元論の主体を各々  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$  という文字で表す。 $\alpha$  はその人の有機体より大きい宇宙の一部を、 $\beta$  はその人の有機体を、 $\gamma$  はその人の精神を表す。その主体  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$  に応じて宇宙  $A$  はそれぞれ  $A_\alpha$ 、 $A_\beta$ 、 $A_\gamma$  に形を変えられ人間の意識に写ってくる。有機体より大きいもの  $\alpha$  を主体とすると、有機体  $\beta$  つまり“個体”を主体とするよりも意識に写る外の世界の各要素たちは拡がったものとしてとらえられる。この  $\alpha$  を主体とする二元論が入った世界はユングの共時性が見られる。

次に  $\beta$  は有機体であるから、それに自己を同一視するとその外部として有機体と対立する“その環境”という概念を持つようになる。その環境の中で主体つまり自己が経験すると思うことにより、その経験する舞台としての“空間”という概念が生じる。また自己が有機体であることにより、有機体には免れることのできない“生死”という概念から自己は“生きている間”に様々なことを経験すると思うのである。そして、“生きている間”に“時間”という区切れを入れる。つまりこの二元論により初めて“空間”、“時間”という概念が生まれる。

更に主体が小さくなりその人の精神  $\gamma$  を自己とみなす場合は、精神を肉体を切り離して考え、肉体を外部とし“精神が肉体を持っている”と考える。そうなると、外の世界は精神がとらえたものつまり感覚でとらえられたものとして意識に写る。

また、これらの二元論によって外の世界としたものに対する“ものの見方”が取り出せる。有機体より大きいもの  $\alpha$  を主体とする二元論からは、有機体を越えたところで関連するようなものたちが1つの意識の“元”とみなされる。それはそのように関連づけてものを見るような見方を用いて得られたものである。これを我々は共時的見方と呼ぶ。有機体  $\beta$  を主体とする二元論からはここで生じた概念“空間”、“時間”をあえて考慮するよ

うな見方と、その概念を排除し“無時間”、“無空間”の中で考えるような見方が生じる。これらをそれぞれ有機的見方、抽象的見方と呼ぶ。更に有機的見方によってとらえられた意識の元の“文化的背景”をその元の“環境”として考える見方も生まれる。この見方を文化的見方と呼ぶ。精神  $\gamma$  を主体とする二元論からは、自己である精神が外の世界をとらえる手段として“感覚”が生じる。その“感覚”を用いた見方を感覚的見方と呼ぶ。

$A_\alpha$  は上で述べたように有機体つまり“個体”を越えたところで関連づけられたものたちを1つの“元”とする集合であり、我々は“起個”と呼ぶ。association という概念を用いて宇宙の要素たちからつくった集合  $A_4$  は  $A_\alpha$  と対等である。 $A_\beta$  については、我々はこれを2つの段階に分けて説明する。見方が“空間、時間をあえて考慮する見方”つまり有機的見方である意識段階を“実存”と呼び  $A_{\beta_3}$  と記し、“空間、時間という概念を排除し、無空間、無時間の中で考えるような見方”つまり抽象的見方である意識の段階を“抽象的概念”と呼び  $A_{\beta_2}$  と記す。 $A_{\beta_3}$ 、 $A_{\beta_2}$  はそれぞれ association を用いてつくった集まり  $A_3$ 、 $A_2$  と対等である。また、精神  $\gamma$  が感覚でとらえたものの集合  $A_\gamma$  は“自我”と呼ばれ、集まり  $A_1$  と対等である。

第3章では、二元論の考え方を用いて論理学に現れるパラドックスを考えてみた。

## 第1章 二元論と association

### 1.1 二元論

二元論とは宇宙が主体 (subject) と客体 (object)、見るものと見られるものに分断されることを言う。つまり宇宙を内と外に分けることである。宇宙を  $A$  で表し、 $c$  という記号を“中にある”または“入っている”という意味で解釈し、以下、

$$c \alpha A$$

と書くと“ $\alpha$  は  $A$  に入っている”と読むことにする。そして“自分”を  $A$  に入っている  $\alpha$  と同一視 (identify) したとき“自分”が何か決まり、そういう自分が主体となり、その自分が外の世界を見、感じる。“自分”を何と同一視するかで世界は姿を変えて意識に写ってくる。例えば、“自分”を自分の精神と同一視する人は

“自分は肉体を持っている”

と思うので、自分の肉体は外の世界のものとみなす。しかし、“自分”を自らの有機体つまり精神と肉体を合わせたような一つの生命体と同一視する人はそのように思わない。なぜならば、彼には自分の肉体は精神と分けることができなく、自分の外のものについてはそれを意識し“持っている”と考えるが自分自身についてはそうは考えないからである。外のものとは意識できたり知覚できるが、自分は自分を意識できない。例えば、デカルトは意識できるものをすべて疑っていったすえに疑っている自分の精神は疑えないことに気付いた。それは疑っている自分の精神は主体であり、その主体は自分自身を観察できないつまり疑えないということである。そして、上の  $\subset \alpha A$  を満たす  $\alpha$ 、つまり宇宙の要素の中で、この自分の精神や有機体のように二元論の主体になれるものを

$$\heartsuit \alpha A$$

と書こう。例えば、自分の精神と他人の肉体を合わせたものなどは一般には一つの主体とは成り得ないとしたい。つまり  $\alpha$  を自分の精神と他人の肉体を合わせたものとする、 $\subset \alpha A$  であるが  $\heartsuit \alpha A$  でないということである。さて、 $\alpha$  が主体になれるとして自分が  $\alpha$  であると同一視したとしよう。このことを  $\alpha$  を主体とする二元論が入ったといい、 $A$  にこの二元論が入り  $\alpha$  の意識にうつったものたちの集まりを以下、

$$A_\alpha$$

と書くことにする。 $\alpha$  を主体とするような主客の分離が起こったことにより、主体  $\alpha$  が外を見る見方とその見方で見て観察した外のものという概念が生じる。見方  $\lambda$  で見られて意識に写った外のもの、 $\lambda$  を通じての  $A_\alpha$  の要素と呼ぶ。そのことを老子は道徳経 [L] の中で次のように述べている。

「道の道う可きは、常に道に非ず」

(宇宙  $A$  を自分が観察して意識がとらえたとき、意識に写ったものは宇宙  $A$  ではない ( $A_\alpha$  である)。

ここで、 $a$  が  $\lambda$  を通じての  $A_\alpha$  の要素であるとき、

$$\in_{A_\alpha \lambda} a$$

と記すことにする。このとき、 $a$  は宇宙  $A$  に入っていて  $\subset \alpha A$  を満たす。また主体  $\alpha$  が  $\lambda$  という見方で  $a$  をとらえて意識に入れたものを意識の元

と呼ぶことにし、

$$(a, \alpha, \lambda, A)$$

で表す。ここで、 $\subset \alpha A$  を満たす  $a$  が2つの主体  $\alpha$ 、 $\beta$  の下で

$$\in_{A_\alpha \lambda_1} a \text{ かつ } \in_{A_\beta \lambda_2} a$$

を満たす、言い換えると、 $a$  は  $\lambda_1$  を通じての  $A_\alpha$  の要素でもあり  $\lambda_2$  を通じての  $A_\beta$  の要素でもあるとき、 $a$  を主体  $\alpha$  で見て意識の元とした  $(a, \alpha, \lambda, A)$  と主体  $\beta$  で見て意識の元とした  $(a, \beta, \lambda, A)$  は区別される。その違いを老子は上の句の対句として、

「名の名づく可きは、常の名に非ず」

( $\subset \alpha A$  である  $a$  に“名”をつける、つまり主体、見方を決め意識にとり入れると、その“名”つまり意識の元 ( $a$ 、(主体)、(見方、 $A$ ) は  $a$  が同じでも主体、見方に応じて異なってくる。)

と述べている。また、宇宙  $A$  に含まれる“異なる”要素たちであっても人間が意識したときには“同じもの”として知覚されることもあるだろう。例えば、主体  $\alpha$  から見て同一方向に見える異なる星たちでも主体  $\alpha$  にとっては同じものとして目に写る。そこで、このように意識に写ったものたちつまり意識の元たちが等しいという概念を記号

$$=_\alpha$$

で表したい。以下では主体  $\alpha$  が観察する見方の集まりを  $\Lambda_\alpha$  と記す。

例えば、 $A$  そのものが集合で、 $\subset$  は通常の包含関係を表すときを考えてみる。このとき、

$$A_c := \{\alpha | \subset \alpha A\}$$

は  $A$  のベキ集合  $P(A)$  であるが、例えば、 $\alpha \in P(A)$  が濃度 = 1 つまり  $\# \alpha = 1$  である  $A$  の部分集合とし、 $\lambda$  を自分自身と濃度が等しいものを元とみなすような見方つまり

$$\in_{A_\alpha \lambda} a \stackrel{\text{def.}}{\Leftrightarrow} \# a = \# \alpha = 1$$

としたとき、

$$\{a | \in_{A_\alpha \lambda} a\}$$

はもともとの  $A$  と集合として等しくなる。

以上説明した二元論について、ウパニシャッド

では、

「まことに、いわば他者といったものがあれば、その場合には、一方が他方を嗅ぎ、一方が他方を味わい、一方が他方を語り、一方が他方を聞き、一方が他方を考慮し、一方が他方に触れ、一方が他方を認識することもありうるでしょう。」[U]

と述べられ、シャンカラの不二一元論の中で、

「経験の主体、経験される対象など（という概念上の区別をあたえられる）多様な現象は、ブラフマンから独立には存在しないと知るべきである。」[Sh]

( $\forall \alpha A$  なる主体  $\alpha$  も、 $\in A_{\alpha} a$  なる対象  $a$  も、もとはブラフマン  $A$  に含まれていたもので  $\subset \alpha A$  かつ  $\subset a A$  であった。)

と述べられている。またヴェスバンドウの中辺分別論には“虚妄分別”の節に

「虚妄なる分別はある。そこに二つのものは存在しない。しかし、そこに空性が存在し、そのなかにまた、かれ（＝虚妄分別）が存在する。」[V]

（“二元論”はある。本来は主、客の別はない。しかし、宇宙  $A$  が存在し、その中に“二元論”が存在する。）

と書かれている。

## 1.2 association

次に、二元論とは別の概念である association を説明しよう。人間がものを知覚する場合、感覚等の見方を用いる。例えば、人が遠くにある星たちを知覚するとき、異なる方向にある星たちはばらばらに見え、一つの星としては知覚されない。しかし、同じ方向にある星たちは視覚以外の何か別の観察する手段を用いなければ一つの星として知覚される。そこで、 $S$  を知覚されるような対象たちの集まりとし、 $\Lambda$  をその対象たちを知覚する際の手段や見方の集まりとする。特に、 $s$  を  $S$  の元としたとき、 $s$  を知覚する際の手段や見方の集まりを  $\Lambda_s$  と書こう。この  $\Lambda_s$  の元により、 $s$  は知覚されることができなければならない。勿論  $\Lambda_s$  は  $\Lambda$  に含まれる。 $s_1$  が見方  $\lambda$  で  $s_2$  と関係があるという

$$s_1 r_{s_1 \lambda} s_2$$

と書く。例えば上の例でいうと、 $\lambda$  を“視覚を用いるとお互い同一視されるものたちを一つのものとして知覚する”という見方としたとき、関係  $r_{s\lambda}$  は“ $s$  と、視覚を用いると  $s$  と同一視されるものとを結びつける”というような関係である。よって、 $s_1$  と  $s_2$  を同じ方向にある星たちとするときは、

$$s_1 r_{s_1 \lambda} s_2$$

であり、 $s_1$  と  $s_2$  を異なる方向にある星たちとするときは、

$$\neg (s_1 r_{s_1 \lambda} s_2)$$

である。

このような関係  $r_{s\lambda}$  を集めたものを  $R$  と書く：

$$R := \{r_{s\lambda} \mid s \in S, \lambda \in \Lambda_s\}.$$

$R$  とは、対象たちをある見方でもって結びつけるような関係の集まりである。このとき、 $R$  に關する次の3つの性質を考える：

(1. I) 任意の対象は、自分自身と関係するような見方を持つ。

(1. II)  $s_1$  が  $\lambda_1$  という見方でもって  $s_2$  と関係しているならば、 $s_2$  にはある見方  $\lambda_2$  が存在してその見方でもって  $s_1$  と関係する。

(1. III)  $s_1$  が見方  $\lambda_1$  で  $s_2$  と関係し、さらに  $s_2$  が見方  $\lambda_2$  で  $s_3$  と関係するとき、ある見方  $\lambda_3$  があってその見方でもって  $s_1$  は  $s_3$  と関係する。

我々は関係の集合  $R$  が (1. I)、(1. II)、(1. III) を満たすとき、 $R$  のことを association と呼ぶ。

つまり、 $R$  が次の Properties (1. I)、(1. II)、(1. III) を満たすとき、 $R$  は index set  $\Lambda$  をもつ  $S$  における association であるという：

$$\text{Property (1. I)} \quad \forall s \in S, \exists \lambda_2 \in \Lambda_{s_2} \text{ s.t. } s r_{s\lambda} s,$$

$$\text{Property (1. II)} \quad s_1 r_{s_1 \lambda_1} s_2 \Rightarrow \exists \lambda_2 \in \Lambda_{s_2}$$

$$\text{s.t. } s_2 r_{s_2 \lambda_2} s_1,$$

$$\text{Property (1. III)} \quad s_1 r_{s_1 \lambda_1} s_2, s_2 r_{s_2 \lambda_2} s_3$$

$$\Rightarrow \exists \lambda_3 \in \Lambda_{s_1} \text{ s.t. } s_1 r_{s_1 \lambda_3} s_3.$$

Remark. この Properties (1. I)、(1. II)、(1. III) については、以下のように書き換えることができる。

$S \times S$  上の relation  $r_\lambda$  ( $\lambda \in \Lambda$ ) を次で定義する：

$$s_1 r_\lambda s_2 \stackrel{\text{def.}}{\Leftrightarrow} \exists r_{s_1 \lambda} \in R \text{ s.t. } s_1 r_{s_1 \lambda} s_2.$$

更に  $S \times S$  上の relation  $r$  を以下で定義する：

$$s_1 r s_2 \stackrel{\text{def.}}{\Leftrightarrow} \exists \lambda \in \Lambda_{s_1} \text{ s.t. } s_1 r_\lambda s_2.$$

そのとき、

$$\text{Property (1. I)} \Leftrightarrow s r s \text{ for } \forall s \in S,$$

$$\text{Property (1. II)} \Leftrightarrow (s_1 r s_2 \Rightarrow s_2 r s_1),$$

$$\text{Property (1. III)} \Leftrightarrow (s_1 r s_2, s_2 r s_3 \Rightarrow s_1 r s_3)$$

となる。

さて、集合  $S$  に index set  $\Lambda$  を持つ association  $R$  があるとす。

このとき、 $s(\in S)$  における  $\lambda(\in \Lambda)$  での  $R$  による **party** とは、次で定義される  $S$  の subset  $P_{s\lambda}$  のことである：

$$P_{s\lambda} := \{s' \in S \mid s r_{s\lambda} s'\}.$$

つまり、 $s$  と見方  $\lambda$  で関係するものをすべて集めてきたものである。

次に、見方の集合  $\Lambda$  にこの party を用いて order を入れたい。 $\lambda(\in \Lambda)$  に対して、

$$S_\lambda := \{s \mid s \in S, \lambda \in \Lambda_s\}$$

としたとき、

$$\lambda < \mu \stackrel{\text{def.}}{\Leftrightarrow} P_{s\lambda} \subset P_{s\mu} \text{ for } \forall s \in S_\lambda \cap S_\mu$$

とする。

以上述べた“二元論”と“association”は“意識の元”を表現するための異なる説明の仕方である。二元論は主体を決め、その主体がある見方でもって“対象”を知覚して取り出し“意識の元”とすることである。一方、association はある見方でもって関係づけられた対象の集まりを“もの”として“意識の元”にするとき用いる概念である。二元論、二元性については東西の哲学の至る所にあらわれる。association は同値関係を見方の集合  $\Lambda$  により index 付きにしたような関係たちの集まりである。

## 第2章 意識の4段階

我々の意識についての説明は、宇宙  $A$  を止めて考え、二元論の主体は Ken Wilber に従い  $\alpha, \beta, \gamma$  の3つを用いる。 $A$  とは二元論の入らない宇宙であり、 $\alpha$  は初めての二元論の主体であり有機体より大きい宇宙の一部を表す。この二元論は初め

て“自分”という概念が生じた状態である。その状態で外の世界を観察するとき、我々はものの方の集合として  $\Lambda_\alpha$  を取る。次に、二元論が進むと自分を自らの有機体とみなすようになる。 $\beta$  はこの有機体を表す。これにより有機体とそれをとりまく環境という二元論が生じる。それは“内と外”、“現在と過去と未来”という分け方を生み、有機体が生きるための場所としての“空間”、有機体が生きる間をはかる“時間”という概念ができる。我々はその状態でのものの方の集合を  $\Lambda_{\beta_3}$  または  $\Lambda_{\beta_2}$  とする。そして更に二元論が進むと、自分の精神を自分とみなすようになる。この精神を  $\gamma$  とする。ここでは“精神と肉体”なる二元論が生まれ、精神が知覚するような見方の集合  $\Lambda_\gamma$  で観察するようになる。 $\Lambda_\gamma$  とは我々の感覚器官を用いる見方の集合に対応する。

各二元論はそれぞれ意識の段階を生む。そして同じ二元論によって生まれた意識でも、1つの段階になるとは限らない。実際は意識の分け方は便宜的なものであり、各哲学により少しづつ異なる。ここで我々が扱うのはヴェーダーンダ、ウパニシャッドらのインド哲学 [U]、アサンガ、ヴァスバンドラによる瑜伽行派哲学（唯識）[V]、フィンネンらによる禅の流れ [Su]、ユングの深層心理学 [J] 等である。

以下で、各段階の意識を記号を用いて説明する。

### 2.1 自我

この段階の意識では、自分を精神と思ひ込み、その精神から見ると自らの肉体さえ自分の一部ではなく観察されるべき外の世界の対象になる。そしてこの段階の二元論、つまり精神と肉体という二元論が生まれる。ここでは主体となるような自分の精神を  $\gamma$  と書く。この精神と肉体という二元論からこの段階の意識を定義したい。この段階の意識を自我と呼ぶ。この自我の段階では、精神が外をとらえる手段としての“感覚”つまり視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚を用いる。そのような感覚の見方の集まりを  $\Lambda_\gamma$  とする。

$\forall \gamma A$  とし、 $\Lambda_\gamma$  を index set とする。このとき  $A_\gamma$  は集合になり、これがこの段階の意識である。

$$A_\gamma := \{(a, \gamma, \lambda, A) \mid \lambda \in \Lambda_\gamma, a \in A\}.$$

この自我の段階では、自分を精神  $\gamma$  とし、感覚  $\Lambda_\gamma$  が生じることにより自分の肉体を知覚し、“自分は肉体を持っている”と思うのである。 $A_\gamma$  の要

素が  $\in A_{\gamma\lambda}$  により決定される。この  $\in A_{\gamma\lambda}$  は肉体をも含む外のを感覚で区別し、元として取り出すのである。

今後、 $\subset aA$  を満たすような  $a$  たちの集まりを  $A_c$  とする：

$$A_c := \{a \mid \subset aA\}.$$

次に、まだ知覚されていない宇宙に含まれている“対象”の集まり  $A_c$  から association を用いてこの自我の段階の意識を説明したい。 $A_c$  の元に対するこの段階でのとらえ方は人間の感覚がとらえるようなとらえ方である。つまり、目、耳、鼻、舌、皮膚という感覚器官を通じて得られるようなとらえ方である。このような感覚的見方の集まりを  $\Lambda_1$  としたい。(1.2) で説明した association という概念を用いて、 $A_c$  の元で、ある感覚的見方を用いるとお互い同一視されるようなものたちを集めてそれらを party とする。そしてこの party と用いた感覚的見方との対を“1つのもの”とし、この段階の意識の元とするのである。この段階の association については、Properties (1. I)、(1. II)、(1. III) をもっと制限した規則をも満たす。

$A_c$  の元  $s$  はどんな感覚的見方を用いても  $s$  自身と同一視されるだろう。つまり、

$$(1. I)' \quad s r_{s\lambda} s \text{ for } \forall \lambda \in \Lambda_s,$$

が成り立つとする。また、

$$(1. II)' \quad s_1 r_{s_1\lambda} s_2 \Rightarrow \lambda \in \Lambda_{s_1s_2}, s_2 r_{s_2\lambda} s_1$$

が成り立つとする。例えば  $A_c$  の元  $s_1$  が視覚によって  $s_2$  と同一視されるならば  $s_2$  も同じ視覚によって  $s_1$  と同一視される、というようなことが各感覚的見方について起こる。具体的に述べよう。 $\lambda$  を“視覚を用いるとお互い同一視されるものたちを1つのものとして知覚する”という見方とすると、関係  $r_{s\lambda}$  は“ $s$  と、視覚を用いると  $s$  と同一視されるものをつなげる”というような関係であり、(1. II)' は、

$s_2$  が視覚を用いると  $s_1$  と同一視されるならば、 $s_1$  は視覚を用いると  $s_2$  と同一視される。

という意味に解釈される。次に、Property (1. III) を見てみよう。この段階の association については、仮定の部分において特に  $\lambda_1$  と  $\lambda_2$  が同じ感覚的見方とし結論の部分の  $\lambda_3$  もそれと同じとしても成立するとする。つまり、

$$(1. III)' \quad s r_{s_1\lambda} s_2, s_2 r_{s_2\lambda} s_3 \Rightarrow s_1 r_{s_1\lambda} s_3$$

が成り立つとするのである。具体的に述べると、(1. III)' は、

$s_2$  が視覚を用いると  $s_1$  と同一視され、かつ  $s_3$  が視覚を用いると  $s_2$  と同一視されるならば、 $s_3$  は視覚を用いると  $s_1$  と同一視される

という意味になる。

つまり、

$$A_{c1} := \{a \mid a \in A_c, \Lambda_{1a} \neq \emptyset\}$$

のとき

$$R_1 := \{r_{a\lambda} \mid a \in A_{c1}, \lambda \in \Lambda_{1a}\}$$

とすると、 $R_1$  は (1. I)'、(1. II)'、(1. III)' を満たすのである。ここで  $A_{c1}$  とは、 $A_c$  の元のうちこの段階の意識が知覚し得る、つまり精神  $\gamma$  がある感覚的見方によってとらえ得るものたちを集めたものである。各  $\lambda (\in \Lambda_1)$  について、

$$A_{c\lambda} := \{a \mid a \in A_c, \lambda \in \Lambda_{1a}\}$$

とし、 $a_1 r_{a\lambda} a_2$  を  $a_1 r_{\lambda} a_2$  と書くならば、 $r_{\lambda}$  は  $A_{c\lambda}$  の中で同値関係になるということを表している。即ち、

$$(1. I)' \Leftrightarrow (s r_{\lambda} s \text{ for } \forall \lambda \in \Lambda_s),$$

$$(1. II)' \Leftrightarrow (s_1 r_{\lambda} s_2 \Rightarrow s_2 r_{\lambda} s_1),$$

$$(1. III)' \Leftrightarrow (s_1 r_{\lambda} s_2, s_2 r_{\lambda} s_3 \Rightarrow s_1 r_{\lambda} s_3)$$

である。

ここで、この段階の意識  $A_1$  を決める。

$$A_1 := \{(P_{a\lambda}, \lambda) \mid a \in A_{c1}, \lambda \in \Lambda_{1a}\}.$$

感覚でとらえたものつまり party と用いた感覚的見方との対がこの段階の意識の元となる。ここでは自分自身についての解釈は感覚を用いて対象をとらえる主体であるとし“自分”のことを感覚的にとらえる主体、つまり自分の精神と同一視する。

さて、上で説明した二元論的解釈により定義した自我  $A_\gamma$  と、association により定義したこの段階の意識  $A_1$  が対等であるということの説明しよう。

まず、ものの方の集合たち  $\Lambda_\gamma$ 、 $\Lambda_1$  は両者とも感覚的見方の集合であり等しいとする：

$$(1) \quad \Lambda_\gamma = \Lambda_1.$$

次に、前章で書いた意識の元たちが等しいという記号  $=_\gamma$  を説明する。 $A$  に含まれる  $a_1, a_2$  が  $\lambda$  ( $\in \Lambda_\gamma$ ) という見方で  $A_\gamma$  の要素である、即ち  $\in_{A_\gamma} a_1, \in_{A_\gamma} a_2$  のとき、

$$(a_1, \gamma, \lambda, A) =_\gamma (a_2, \gamma, \lambda, A)$$

であるとは、意識  $A_\gamma$  の中で両者がお互い同一視されることである。よってこのとき、 $a_1, a_2$  は  $r_{a_1 \lambda}$  で関係するとする：

$$a_1 r_{a_1 \lambda} a_2.$$

逆も同様であるとし、結局、

$$(2) \quad ((a_1, \gamma, \lambda, A) =_\gamma (a_2, \gamma, \lambda, A)) \\ \Leftrightarrow a_1 r_{a_1 \lambda} a_2$$

とするのである。また、知覚される“もの”たちは同じとするので、

$$(3) \quad \{a | \subset aA, \lambda \in \Lambda_\gamma, \in_{A_\gamma} a\} = A_{c1}.$$

更に、 $a$  が  $\lambda$  による  $A_\gamma$  の要素であるということは、見方  $\lambda$  で  $a$  が知覚され得ることなので、

$$(4) \quad \in_{A_\gamma} a \Leftrightarrow \lambda \in \Lambda_{1a} (\Leftrightarrow (P_{a\lambda}, \lambda) \in A_1)$$

と置くことにする。

以上を認めると、

$$A_\gamma = A_1$$

になる。

$$\text{Proof. 写像 } p_1: \begin{matrix} A_\gamma & \rightarrow & A_1 \\ \Downarrow & & \Downarrow \\ (a, \gamma, \lambda, A) & \mapsto & (P_{a\lambda}, \lambda) \end{matrix}$$

とする。  $\forall (P_{a\lambda}, \lambda) \in A_1$  に対して、(4) より、

$$\in_{A_\gamma} a$$

となるので  $p_1$  は surjective である。また、

$$(P_{a_1 \lambda_1}, \lambda_1) = (P_{a_2 \lambda_2}, \lambda_2)$$

とすると、

$$\lambda_1 = \lambda_2 \text{ かつ } a_1 r_{a_1 \lambda_1} a_2$$

である。よって (2) より、

$$(a_1, \gamma, \lambda_1, A) =_\gamma (a_2, \gamma, \lambda_2, A)$$

であり、 $p_1$  は injective である。

この意識の段階は、意識の元としてとらえる手段が感覚がなく、抽象的概念は考えていない。このような意識の段階は、いわばデカルトの世界である。例えば省察 [D] の中で、この段階の主体  $\gamma$  について次のように述べられている：

「まことに、私が、疑い、理解し、意志するものであることは、きわめて明白であって、このことをさらにいっそう明らかに説明するようなものは何一つとして見当たらない。」

また、

「「私はある、私は存在する」というこの命題は、私がかれをいいあらわすたびごとに、あるいは、精神によってとらえるたびごとに、必然的に真である。」

見方  $\Lambda_\gamma$  については、

「この同じ私はまた、感覚するものでもある。いいかえると、物的なものを、感覚器官を介したのとして認めるものでもある。すなわち、私は光を見、騒音を聞き、熱を感じる。」

と述べられ、主体  $\gamma$  がとらえたものの集合  $A_\gamma$  については、

「物体とは、なんらかの形によって限られ、場所によって囲まれ、他のすべての物体をそこから排除するようなしかたで空間をみたすようなもの、また、触覚、視覚、聴覚、味覚、あるいは嗅覚によって知覚されるようなもの、なおまた、多くのしかたで動かされるが、しかし自分自身によって動くことは決してなく、何か他のものの接触を受けて、それによって動かされるようなもの、こういうものいっさいのことである。」

と述べられていて、さらに  $A_\gamma$  の元として蜜ろうを例にとって以下のように説明している：

「精神によってしかとらえられないこの蜜ろうとは、いったいどういうものであるか。もとよりそれは、私が見たり、触れたり、想像したりする蜜ろうと同じものである。つまり、私が最初から蜜ろうだとみなしていたものと同じものである。しかしまた、注意しなくてはならないことだが、それを把握するは

たらきそのものは、視覚の作用でも、触覚の作用でも想像力の作用でもなく、また、たとえ以前にはそう思われたにしても、けっしてそういうものであったのでもなく、精神のみによる洞見なのである。」

様々な哲学の中でこの段階の意識はいろいろな名で呼ばれている。例えばヴェーダーンダ、ウパニシャッド [U] では“物理的存在の鞘 (グロス体)」、唯識、瑜伽行派哲学 [V] では“五識 (5つのヴィジュニャーナ)”つまり目、耳、鼻、舌、皮膚による五感から得られた感覚的意識、また禅 [Su] では“感覚と思考”と呼んでいる。それらが表現しているものはほぼ同じである。

## 2.2 抽象的概念

この意識の段階では、自己を自らの有機体つまり精神だけではなく肉体をも合わせたような生命体と同一視し、自己の外部として環境を切り離す。そして有機体と環境という二元論を生む。 $\beta$ を自らの有機体とし、この主体である有機体 $\beta$ が見るようなものの見方の集合を $\Lambda_\beta$ とする。更に、自分を有機体と同一視することにより環境の中にいる自分という立場になり、環境の中での自分の“位置”を考えることができるようになり、初めて“空間”という概念が生じる。また、主体である有機体は変化し最終的に“死”を迎えるので、自分の“生死”ということを考えるようになる。自分は自分が生きている間に経験すると思ひ、本来区切りのない宇宙に“時間”という目盛りを入れる。そして、自分の外部とした環境を見るために“空間”、“時間”という概念を使うのである。そのことによって、宇宙から空間的にも時間的にも切り離され孤立してしまった自己つまり有機体は“ずっと続くような拡がり”や“永遠”を欲求し、“無空間”、“無時間”またそのようなプラトンの世界を考えるようになる。それが抽象的概念や数学の始まりであると我々は考える。このように外部にしてしまった環境を“無空間”、“無時間”を目指して理想化し、プラトンの世界にしたものがこの意識の段階 $A_{\beta_2}$ である。我々は $A_{\beta_2}$ を抽象的概念の世界と呼ぶ。この段階での主体 $\beta$ がする抽象的にとらえるような見方の集合を $\Lambda_{\beta_2}$ で表す。他方、環境を自分つまり有機体が経験する舞台として考え、自分を環境の中でのいろいろな経験の主体とし、環境を空間的にも時間的にもある拡が

りを持つものとして残して考えるとき、次節で説明する意識の段階 $A_{\beta_3}$ を生む。ここで、この意識の段階 $A_{\beta_2}$ を二元論的に説明する。

$\heartsuit \beta A$  とし、 $\Lambda_\beta$  を index set とする。このとき、 $A_\beta$  は集合になるとする。 $\Lambda_\beta$ 、 $A_\beta$  は 2 つの disjoint な subsets の union とする：

$$\begin{aligned} \Lambda_\beta &= \Lambda_{\beta_2} \amalg \Lambda_{\beta_3}, \\ A_\beta &= A_{\beta_2} \amalg A_{\beta_3}. \end{aligned}$$

この $A_{\beta_2}$ がこの段階の意識である。

$$A_{\beta_2} := \{(b, \beta, \lambda, A) \mid \lambda \in \Lambda_{\beta_2}, \in A_{\beta_2} \ b\}.$$

$A_{\beta_3}$ については次節で説明する。

また、この段階の意識の元は association を用いても説明される。感覚でとらえたものの集まり $A_1$ の元たちをさらに抽象的見方でまとめて抽象化することである。感覚でとらえたものたちをある見方でもって名前を付けるような操作などが抽象化にあたる。例えば、“この木製机” $a (\in A_1)$  に関して“機能が同じ”という見方 $\lambda_1$ でまとめると、

$$P_{a\lambda_1} = \{a, \text{あの机, この鉄製机, } \dots\}$$

となり、これと $\lambda_1$ との組 $(P_{a\lambda_1}, \lambda_1)$ は“机”という名前、つまり“机”という抽象的概念である。また $a$ に関して“材質が同じ”という見方 $\lambda_2$ でまとめると、

$$P_{a\lambda_2} = \{a, \text{この木製椅子, この桃の木, } \dots\}$$

となり、 $(P_{a\lambda_2}, \lambda_2)$ は“木”という名前、“木”という抽象的概念である。次に、 $\lambda_3$ を $\lambda_1$ かつ $\lambda_2$ つまり“機能が同じかつ材質が同じ”という見方とすると、

$$P_{a\lambda_3} = \{a, \text{あの木製机, } \dots\}$$

となり $(P_{a\lambda_3}, \lambda_3)$ は“木製机”という概念である。ここで、

$$\begin{aligned} P_{a\lambda_3} &\subset P_{a\lambda_1}, \\ P_{a\lambda_3} &\subset P_{a\lambda_2} \end{aligned}$$

である。このような抽象化された概念をこの段階の意識の元としたい。その概念とは“机”、“愛知県”、“猫”、“木製椅子”などである。上の例における $\lambda_1$ や $\lambda_2$ などの抽象的見方の集合を $\Lambda_2$ とする。この $\Lambda_2$ には、 $\lambda_3$ つまり“機能が同じかつ材質が同じ”という見方のほうが $\lambda_1$ つまり“機能が同じ”という見方より狭い見方とする、というよう



な order を入れたい。つまり、

$$A_{1\lambda} := \{a \mid a \in A_1, \lambda \in \Lambda_{2a}\},$$

$$\lambda \in \Lambda_{2a} \Leftrightarrow \exists r_{a\lambda}$$

としたとき、

$$\lambda_1 < \lambda_2 \stackrel{\text{def.}}{\Leftrightarrow} A_{1\lambda_1} \cap A_{1\lambda_2} \neq \emptyset$$

$$\text{かつ } P_{a\lambda_1} \subset P_{a\lambda_2} \text{ for } \forall a \in A_{1\lambda_1} \cap A_{1\lambda_2}$$

としたい。またもうひとつ例をあげると、“同じ県内の土地である”という見方  $\lambda_1$  よりも“同じ国内の土地である”という見方  $\lambda_2$  の方が大きいとしたいのである。

$$A_{1\lambda_1} \cap A_{1\lambda_2}$$

の元  $a$  として“名古屋の土地”をとったとき、 $P_{a\lambda_1}$  の元は愛知県の土地の一部であり、 $P_{a\lambda_2}$  の元は日本の土地の一部であると解釈すると、

$$P_{a\lambda_1} \subset P_{a\lambda_2}$$

になる。またこの段階の意識においても、見方  $\lambda$  を止めて考えるときは、 $A_{1\lambda}$  は party たちとして同値類に類別されるとする。つまりここでの association  $R_2$  も (1. I)'、(1. II)'、(1. III)' を満たすとするのである。そして、この意識の段階  $A_2$  は party と用いた抽象的見方  $\lambda$  との対の集まりとして説明される。

$A_1$  に order 付き index set  $\Lambda_2$  を持ち (1. I)'、(1. II)'、(1. III)' を満たす association  $R_2$  があるとし、

$$A_1' := \bigcup_{\lambda \in \Lambda_2} A_{1\lambda}$$

$$= \{a \mid a \in A_1, \exists r_{a\lambda} \text{ s.t. } \lambda \in \Lambda_2\}$$

$$= \{a \mid a \in A_1, \Lambda_{2a} \neq \emptyset\}$$

とする。このとき、

$$A_2 := \{(P_{a\lambda}, \lambda) \mid a \in A_1', \lambda \in \Lambda_{2a}\}$$

とする。

さて、特に  $A_2$  の元として“文字  $a$ ”を考える。ノートの右端に表記されている“ $a$ ” ( $\in A_1$ ) と左端に表記されている“ $a$ ” ( $\in A_1$ ) が同じ文字として同一視されたとき、それらにより抽象的概念“文字  $a$ ” ( $\in A_2$ ) が生まれる。このようなアルファベットの文字たちと定められた特定の記号たち ( $\neg$ ,  $\in$  など) を一列に並べて書いたもの、つまり文字列について、それが論理式であると認める規則とそ

れが定理であると認める規則を設ける。数学的理論はこのような文字列と規則たちから成り立っている。つまり、 $A_2$  のある subset は数学的理論に用いられる文字たちと定められた特定の記号たちの集合であるとしてたい。

また、プラトンはバイドン [PI] の中で、 $P_2$  の元  $r_{a\lambda}$  について“等しさそのもの”という言葉を用いて説明している：

「[そして]ぼくたちは、等しさがそれ自身何であるかを知っているね？」

「はい。」

「その知識をぼくたちはどこから得たのだろうか？いま述べたような事物からではないだろうか。つまり、木材とか、石とかなにかそういうものが、たがいに等しいのを見て、それから、それらとは別の、あの等しさそのものを考えたのではないだろうか。それとも、君には、等しさそのものが等しい事物と別のものだとは思えないかね？」

さて、前節と同様に、二元論的に定義した  $A_{\beta_2}$  と association を用いて説明した  $A_2$  は対等な集合であるとしてたい。その対応を考える。

まず、それぞれに用いた抽象的見方の集合  $\Lambda_{\beta_2}$  と  $\Lambda_2$  は対等とする：

$$(2) \Lambda_{\beta_2} = \Lambda_2$$

$$\begin{array}{c} \Downarrow \\ \Downarrow \\ \lambda \mapsto \lambda' \end{array}$$

次に、二元論的にとらえられた抽象的概念の集合  $A_{\beta_2}$  の元をつくる“素”たちと、association によってまとめられてつくられた抽象的概念の集合  $A_2$  の元をつくる“素” ( $\in A_{c_1}$ ) たちは等しいとする。つまり、

$$A_{c_2} := \{b \mid b \subset bA, \exists \lambda \in A_{\beta_2} \text{ s.t. } \in_{A_{\beta_2}} b\},$$

$$A_{c_1}' := \{b \mid b \in A_{c_1}, \exists \mu \in \Lambda_{1b} \text{ s.t. } (P_{b\mu}, \mu) \in A_1'\}$$

とするとき、

$$(2) A_{c_2} = A_{c_1}'$$

とするのである。また、宇宙に含まれている  $b(\subset bA)$  をある感覚的見方  $\mu(\in \Lambda_{1b})$  を用いて知覚して  $A_1'$  の元

$$b' = (P_{b\mu}, \mu)$$

にし、さらにこれを抽象的見方  $\lambda'(\in \Lambda_{2b})$  を用い

て抽象化したもの、つまり  $A_2$  の元  $(P_{b'\lambda'}, \lambda')$  に対して、“素”  $b$  は二元論的にも  $\lambda'$  に対応する見方  $\lambda$  を用いて抽象的概念としてとらえられる、つまり、

$$\in A_{\beta\lambda} b$$

であるとする。つまり、

$$(3) \quad (P_{b'\lambda'}, \lambda') \in A_2, b' = (P_{b\mu}, \mu) \Rightarrow \in_{\alpha\beta\lambda} b$$

とするのである。逆に、宇宙に含まれていて、ある抽象的見方  $\lambda(\in \Lambda_{\beta_2})$  を用いて二元論的にとらえられるような“素”  $b(\in A_{\alpha_2})$  に対して、それを感覚的にとらえて  $A_1$  の元

$$a = (P_{b\mu}, \mu)$$

とし、さらに  $\lambda$  に対応する見方  $\lambda'(\in \Lambda_{2\alpha})$  を用いて  $A_2$  の元  $(P_{a'\lambda'}, \lambda')$  にすることができるとする。つまり、

$$(4) \quad \in_{\alpha\beta\lambda} b$$

$\Rightarrow \exists \mu \in \Lambda_{1b}$  s.t.  $((P_{b\mu}, \mu) = a$  のとき、 $(P_{a'\lambda'}, \lambda') \in A_2$ ) とする。最後に、二元論的に説明したこの段階の意識  $A_{\beta_2}$  の 2 つの元

$$(b_1, \beta, \lambda_1, A), (b_2, \beta, \lambda_2, A)$$

が等しい、つまり、

$$(b_1, \beta, \lambda_1, A) =_{\beta} (b_2, \beta, \lambda_2, A)$$

であることの条件を述べる。抽象的見方は同じ見方でなければいけないとする：

$$\lambda_1 = \lambda_2.$$

この二元論的な元  $(b_1, \beta, \lambda_1, A)$  とは、宇宙  $A$  に含まれているまだ知覚されていない“対象”  $b_1 (\subset b_1 A)$  “素” にするような抽象的概念である。この概念を association を用いて表す。まず“素”  $b_1 (\in A_{\alpha_1})$  をある感覚的見方  $\mu_1 (\in \Lambda_{1b_1})$  を用いて  $A_1$  の元

$$b_1' = (P_{b_1\mu_1}, \mu_1)$$

にする。そしてこの  $b_1'$  を  $\lambda_1$  に対応する見方  $\lambda_1'$  で抽象化し、抽象的概念

$$(P_{b_1'\lambda_1'}, \lambda_1')$$

にするのである。  $A_{\beta_2}$  の 2 つの元が同じ抽象的概念を表すということは、このように、“素” をある感

覚的見方を用いて知覚し、その知覚したものを対応する抽象的見方で抽象化し、  $A_2$  の元としたとき相等しくなるということである。“素” や用いた感覚的見方が異なっても、最終的に同じ  $A_2$  の元になりさえすればよいのである。よって、

$$(5) \quad (b_1, \beta, \lambda_1, A) =_b (b_2, \beta, \lambda_2, A) \\ \stackrel{def}{\Leftrightarrow} (\mu_1 \in \Lambda_{1b_1}, b_1' = (P_{b_1\mu_1}, \mu_1) \in A_1', (P_{b_1'\lambda_1'}, \lambda_1') \in A_2 \text{ か } \mu_2 \in \Lambda_{1b_2}, b_2' = (P_{b_2\mu_2}, \mu_2) \in A_1', (P_{b_2'\lambda_2'}, \lambda_2') \in A_2) \text{ のとき、} \\ (P_{b_1'\lambda_1'}, \lambda_1') = (P_{b_2'\lambda_2'}, \lambda_2')$$

と定義する。

以上の (1)、(2)、(3)、(4)、(5) を認めると、

$$A_{\beta_2} = A_2$$

となる。

Proof. (3) より写像  $p_2$  が定義できる：

$$p_2: A_2 \rightarrow A_{\beta_2} \\ \Downarrow \qquad \qquad \Downarrow \\ (P_{b'\lambda'}, \lambda') \mapsto (b, \beta, \lambda, A)$$

(但し、 $b$  とは、

$$1. \quad (P_{b\mu}, \mu) \in A_1',$$

$$2. \quad a = (P_{b\mu}, \mu) \text{ とすると}$$

$$(P_{a'\lambda'}, \lambda') \in A_2, (P_{a'\lambda'}, \lambda') = (P_{b'\lambda'}, \lambda')$$

となるような  $\mu (\in \Lambda_{1b})$  が存在する

としたとき、1、2 を満たすような  $A_{\alpha_2}$  の元である)。

$p_2$  は (5) の  $\Leftarrow$  より well-defined である。また、(5) の  $\Rightarrow$  より injective であり、(1)、(2)、(4) より surjective である。

一般には、この段階の意識は抽象的概念、知性、または生物社会と呼ばれるものである。そして、ヴェーダーンダ、ウパニシャッド [U] では“分別の鞘”または“推論の鞘”、唯識、瑜伽行派哲学 [V] では“知性”また禅ではこの段階と次の段階の意識を合わせて“統覚の心”と呼んでいる。日本の神道の奇魂がこれにあたる。

### 2.3 実 存

前節で述べたように、この意識の段階では自分を自らの有機体と同一視する。そして自分は自分が外部とみなした“環境”の中に存在すると思いつ込む。“環境”の中でいろいろな経験をしている主体として自分がいるとし、自分を取りまく“文化的背景”という概念が生まれ、その中で、生き

ているのだと思う。ところが、そのように“環境”から自分が切り離されたことにより、自分をとりまく文化的背景などの環境の中に自分の存在価値を見出したいという欲求が生まれる。そしてその存在価値を見出したとき、自分は実存しているのだと思う。このように、この段階の意識は  $A_{\beta_2}$  と二元論こそ同じくするが、 $A_{\beta_2}$  とは違い環境を無視した無時間、無空間というプラトンの世界へは向かわずに、環境をそのまま自分から切り離されないものとして尊重する。また、自分をそのように環境にとり囲まれた有機体として考えることにより、その人の知覚する“もの”たちも同様に有機的にとらえられた“もの”であり、さらにその“もの”に付随する文化的背景をも合わせて持つて考える。このような意識の段階における、主体  $\beta$  がする有機的にとらえ方の集合を  $\Lambda_{\beta_3}$  とする。前節で述べた  $A_{\beta_3}$  がこの段階の意識である：

$$A_{\beta_3} := \{(b, \beta, \lambda, A) \mid \lambda \in \Lambda_{\beta_3}, \in A_{\beta_2} b\}.$$

次に、この段階の意識の元のとらえ方を association を用いて説明する。感覚的にとらえたものである  $A_1$  の元  $a$  を  $\lambda$  という有機的見方で有機的にとらえ直して1つの有機的なものとして知覚するのである。例えば  $A_1$  の元として目に写ったある人の手をとろう。この元を有機的見方  $\lambda$  つまり生命体としてとらえるような見方でとらえ直すと、それは分けることのできない個人としての生命体であり精神も肉体も含むような“その人”となる。この段階の意識  $A_3$  とは、その有機的に知覚されたものと用いた有機的見方  $\lambda$  との対の集まりである。また有機的見方の集合を  $\Lambda_3$  とする。 $A_3$  を以下で定義する。

$A_1$  に index set  $\Lambda_3$  を持つ association  $R_3$  があるとする。このとき、この段階の意識  $A_3$  の元とは、 $R_3$  による party と用いた  $\lambda (\in \Lambda_3)$  との対である：

$$A_1'' := \{a \mid a \in A_1, \Lambda_{3a} \neq \emptyset\} \text{ としたとき、}$$

$$A_3 := \{(P_{a\lambda}, \lambda) \mid a \in A_1'', \lambda \in \Lambda_{3a}\}.$$

次に、 $A_3$  の元つまり有機的にとらえられたものに対する文化的背景を考える。文化的背景を生む文化的見方は、例えば“地域の見方”もあれば“時代の見方”もあるように様々な見方がある。このような文化的見方の集合を  $\Lambda_3'$  で表す。我々はこの文化的見方についての広い、狭いを考え、それに基づいた order を  $\Lambda_3'$  に入れたい。例えば有機的にとらえられた“ある人”について、この意識の

段階では育った環境つまり家庭、時代、地域などから切り離しては考えない。文化的背景とはこのような“環境”のことを言い、文化的見方とはそれを考慮するような見方である。その見方の中に、見方が大きくなれば背景も大きくなる、というような order が入れたいのである。有機的なもの  $a (\in A_3)$  に対して、 $a$  についての文化的背景を考えるような見方の集合を  $\Lambda_{3a}' (\subset \Lambda_3')$  で表すとする。 $a$  についてのある文化的見方  $\lambda' (\in \Lambda_{3a}')$  によって生み出された文化的背景を写像  $P_{3a}$  で対応させる。

$\Lambda_3'$  を order 付き index set とする。各  $a (\in A_3)$  に対して、 $\Lambda_3'$  の subset  $\Lambda_{3a}'$  が決まるとする。このとき、任意の  $a (\in A_3)$  に対して  $\Lambda_{3a}'$  から  $P(A_3)$  への写像  $P_{3a}$  があるとすると：

$$P_{3a}: \Lambda_{3a}' \rightarrow P(A_3).$$

また、対応  $P_3$  を以下とする：

$$\begin{array}{ccc} P_3: & A_3 \times \Lambda_3' & \rightarrow & P(A_3) \\ & \cup & & \cup \\ & (a, \lambda') & \mapsto & P_{3a}(\lambda') \end{array}$$

(但し、 $\lambda' \in \Lambda_{3a}'$ ).

対応  $P_3$  は、有機的なもの  $a (\in A_3)$  と  $a$  に関する文化的見方  $\lambda' (\in \Lambda_{3a}')$  の組に対して、 $a$  を  $\lambda'$  で見たときの  $a$  の文化的背景を対応させるものである。このとき  $a$  自身は  $a$  の文化的背景  $P_3(a, \lambda)$  に含まれるとする。また、文化的見方が広くなればその見方で見た文化的背景に含まれる有機的なものたちが多くなる、とする。よって、対応  $P_3$  は次の条件を満たすとすると：

$$(3. I) \quad \forall a \in A_3, \forall \lambda' \in \Lambda_{3a}' \text{ に対して、} a \in P_3(a, \lambda').$$

$$(3. II) \quad \forall a \in A_3, \forall \lambda_1', \lambda_2' \in \Lambda_{3a}' \text{ に対して、} \lambda_1' < \lambda_2' \Rightarrow P_3(a, \lambda_1') \subset P_3(a, \lambda_2').$$

このとき、この段階の意識  $A_3$  の元にその文化的背景を考慮したようなものの集合  $A_3'$  を決める：

$$A := \{a \mid a \in A_3, \Lambda_{3a}' \neq \emptyset\} \text{ としたとき、}$$

$$A_3' := \{(a, \lambda') \mid a \in A, \lambda' \in \Lambda_{3a}'\}.$$

$A_3'$  の order が  $\Lambda_3'$  の order から定義される：

$$a_1, a_2 \in A_3, \lambda_1' \in \Lambda_{3a_1}', \lambda_2' \in \Lambda_{3a_2}'$$

つまり、 $(a_1, \lambda_1'), (a_2, \lambda_2') \in A_3'$  とするとき、

$$(a_1, \lambda_1') < (a_2, \lambda_2') \stackrel{def.}{\Leftrightarrow} a_1 = a_2, \lambda_1' < \lambda_2'.$$

また、前節で

$$A_{\beta_2} = A_2$$

としたことと同様に、 $A_{\beta_3}$  と  $A_3$  の間に条件を設け、

$$A_{\beta_3} = A_3$$

とする。

この段階の意識はヴェーダーンダ、ウパニシャッド [U] では“生命力の鞘”と呼ばれ、前段階の意識の分別の鞘、推論の鞘と合わせてサトル体と言われている。唯識、瑜伽行派哲学 [V] では“マナ識”と呼ばれている。また、西洋の実存哲学者たちの著した世界がこれにあたる。例えば、キルケゴール [K] の“不安”とは有機体と環境として分断された自己への不安である。ハイデッガーの存在と時間 [H] の中には、

「空間の内存在するという在り方に対して、現存在は境界を画されなければならなかったのであって、われわれはそうした在り方を内存性と名づける。この内存性とは、それ自身拡がりのある一つの存在者が、一つの拡がりのあるものの拡がりのある諸限界によって取り囲まれているということである。内存的な存在者とそれを取り囲むものとは、二つながら空間の中で事物的に存在している。」

と述べられており、また

「死において現存在が全未済分を達成するならば、同時にそれは、現の存在を喪失することなのである。」

とある。

#### 2.4 超 個

この段階の意識においては、“自分”を自らの有機体より大きいもの  $\alpha$  に同一視している。つまり、何か大きな宇宙の一部分を“自分”とみなす。“自分”というと単に例えば“この自らの精神”や“この自らの肉体”で構成されるいわゆる“個体”とはみなさず、空間的にも時間的にもっと大きな“個体”を越えたものと同一視するのである。よって、この段階の意識を超個と呼ぶ。自分をそのようにとらえることにより、外部とみなしたものを単なる“個体”とされているものつまり感覚によって“ひとつのもの”として

知覚されたようなものたちをある見方で関係づけたようなものを意識の元としてとらえるのである。このような見方を共時的見方と呼ぶ。

$\Lambda_4$  を集合として、 $A_c \times \Lambda_4$  から  $P(A_c)$  への対応  $P_4$  があるとする。また各  $a \in A_c$  に対して  $\Lambda_4$  の subset  $\Lambda_{4a}$  が決まるとする。このとき、この段階の意識  $A_4$  は次のように説明される：

$$A_4 := \{(P_4(a, \lambda), \lambda) \mid a \in A_c, \lambda \in \Lambda_{4a}\}.$$

更に、 $A_4 \times \Lambda_1$  から  $P(A_1)$  への対応が次の様に与えられる：

$$\begin{array}{ccc} A_4 \times \Lambda_1 & \rightarrow & P(A_1) \\ \cup & & \cup \\ ((P_4(a, \lambda), \lambda), \mu) & \mapsto & \{(P_{a', \mu}, \mu) \mid a' \in P_4(a, \lambda)\}. \end{array}$$

この対応は、 $A_4$  の元を自我の段階の元たち、つまり感覚でとらえてひとつのものとしたものたちに分けて考えるという意味である。

また二元論的に述べると、この段階の意識は、 $\forall \alpha A$  なる  $\alpha$  と集合  $\Lambda_\alpha$  による  $A_\alpha$  である。この  $A_\alpha$  は集合とする。

自我の段階と同様にして、

$$A_\alpha = A_4$$

とする。

この段階での主体  $\alpha$  は有機体より大きいような宇宙の一部である。特に、主体  $\alpha$  が一番大きい場合、つまり宇宙  $A$  である場合を考える。この場合の共時的見方の集合  $\Lambda_A$  の中には、対応  $P_4$  の像が  $A_c$  つまり宇宙に含まれる要素全体になるような共時的見方  $\lambda$  が含まれるとする。つまり、

$$\exists \lambda \in \Lambda_A \text{ s.t. } (\exists a \in A_c \text{ s.t. } P_4(a, \lambda) = A_c).$$

とする。更に、 $\Lambda_A$  の中には、どんな宇宙の要素つまり  $A_c$  の元との  $P_4$  による像も  $A_c$  になるような共時的見方も含まれるとする：

$$\exists \lambda \in \Lambda_A \text{ s.t. } (P_4(a, \lambda) = A_c \text{ for } \forall a \in A_c).$$

この後者の条件を満たすような  $\lambda (\in \Lambda_A)$  たちの集合を  $\Lambda_{A'}$  と書き、 $\Lambda_{A'}$  を共時的見方としてつくった  $A_4$  の subset を  $A_{A'}$  とする：

$$A_{A'} := \{(P_4(a, \lambda), \lambda) \mid a \in A_c, \lambda \in \Lambda_{A'}\} = \Lambda_{A'}.$$

この段階の意識は、ヴェーダーンダ、ウパニシャッド [U] では“至福の鞘 (コーザル体) ”、唯識、瑜伽行派哲学 [V] では“アーラヤ識”、禪

[Su] では“プラジュニヤー”と呼ばれている。

### 第3章 補 足

#### 3.1 個人の意識

今までの説明では、各段階の意識は一般的な人間全体の意識を説明するものであるとしてきた。各個人においてはその人に知覚される対象の範囲はもっと狭いであろうから、 $A_c$  の代わりに  $A_c$  の部分集合  $A_c^{\text{個人}}$  にする。また各個人にとってもこの見方の集合も  $\Lambda_i$  ( $i=1, 2, 3, 4$ ) の元すべてとれるとは限らないので、これも  $\Lambda_i$  の部分集合  $\Lambda_i^{\text{個人}}$  にし、各個人の association も  $R_i$  の部分集合  $R_i^{\text{個人}}$  にする。その結果、各個人の意識  $A_i$  は同じ段階の意識であっても個人によって異なる。例えば、同じ自我の段階の意識でも個人によってその元たちは異なってくるのである。このように意識の状態は人によって様々に異なるが、ここでは意識の元たちが関連づけられているつまり共通な要素を持つような性質を持つ個人の意識を考える。そのような性質たちを、 $P_{s\lambda}$  を位相にあたるものと考えて、結合性質と呼びたい。代数幾何学のザリスキー位相に似たものである。このような性質は意識の各段階  $A_i$  において考えることができるものであるが、ここでは  $A_1$  に関して述べる。(1.2) で用いた記号を使うが、 $A_1$  についてなので  $S$  を  $A_c$  と読み換え、 $\Lambda$  を  $\Lambda_1$  と読み換えることにする。

以下では、

$$T := \{(P_{s\lambda}, \lambda) \mid s \in S^{\text{個人}}, \lambda \in \Lambda_s^{\text{個人}}\}$$

とする。

まず、すべての意識の元が関連づけられた状態を考える。

$$\text{Property 1. } \forall (P_{s\lambda}, \lambda), (P_{s'\lambda'}, \lambda') \in T \text{ 対して、} \\ P_{s\lambda} \cap P_{s'\lambda'} \neq \emptyset$$

次に、これを弱めた状態であるが、どんな元もある元と関連づけられた状態を考える。

$$\text{Property 2. } \forall (P_{s\lambda}, \lambda) \in T, \exists (P_{s'\lambda'}, \lambda') \in T \setminus \{(P_{s\lambda}, \lambda)\} \text{ s.t. } P_{s\lambda} \cap P_{s'\lambda'} \neq \emptyset$$

また、Property 1 ではどんな 2 つの元も関連づけられたが、これにより弱い状態として、どんな 2 つの元もそれらを橋渡しする元たちがありそれらによって間接的に関連づけられるという状態を考える。つまり、2 つの元たちを関連づけるような

元たちが選べるのである。

$$\text{Property 3. } \forall (P_{s\lambda}, \lambda), (P_{s'\lambda'}, \lambda') \in T, \exists s_i \\ \exists S^{\text{個人}}, \exists \lambda_i \in \Lambda_{s_i}^{\text{個人}} (i \in \{1, \dots, m\}) \text{ s.t. } (s_0 = s, \\ \lambda_0 = \lambda, s_{m+1} = s', \lambda_{m+1} = \lambda' \text{ とすると} \\ P_{s_i\lambda_i} \cap P_{s_{j+1}\lambda_{j+1}} \neq \emptyset (j \in \{0, \dots, m\})).$$

次は、どんな元に対しても、合わせるると全体を張るような、その元を含む関連する元たちを選ぶことができるという状態を考える。

$$\text{Property 4. } \forall (P_{s_0\lambda_0}, \lambda_0) \in T, \exists \{(P_{s_i\lambda_i}, \lambda_i) \in \\ T \mid i \in \{1, \dots, m\}\} \text{ s.t. } (\bigcup_{j=0}^m P_{s_j\lambda_j} = T \\ \text{かつ } \forall k \in \{0, \dots, m\}, \exists 1 \in \{0, \dots, m\} \setminus \{k\} \text{ s.t.} \\ P_{s_k\lambda_k} \cap P_{s_1\lambda_1} \neq \emptyset).$$

更にこれを弱くして、どんな元に対しても、それらを合わせると全体を覆えるような、その元を含むある元たちが存在するという状態を考える。

$$\text{Property 5. } \forall (P_{s_0\lambda_0}, \lambda_0) \in T, \exists \{(P_{s_i\lambda_i}, \lambda_i) \in \\ T \mid i \in \{1, \dots, m\}\} \text{ s.t. } \bigcup_{j=0}^m P_{s_j\lambda_j} = T.$$

Property 4 を弱めたものとしては、他に

$$\text{Property 6. } \exists \{(P_{s_i\lambda_i}, \lambda_i) \in T \mid i \in \{1, \dots, m\}\} \\ \text{s.t. } (\bigcup_{j=0}^m P_{s_j\lambda_j} = T \\ \text{かつ } \forall k \in \{0, \dots, m\}, \exists 1 \in \{0, \dots, m\} \setminus \{k\} \text{ s.t.} \\ P_{s_k\lambda_k} \cap P_{s_1\lambda_1} \neq \emptyset)$$

があり、更に次のものも考えられる。

$$\text{Property 7. } \exists \{(P_{s_i\lambda_i}, \lambda_i) \in T \mid i \in \{1, \dots, m\}\} \\ \text{s.t. } \bigcup_{j=0}^m P_{s_j\lambda_j} = T.$$

#### 3.2 うそつきパラドックスが意識に写る様子

この節では、我々の定義した二元論の考え方をを用いて、論理学に現れた“うそつきパラドックス”が意識に写る様子を考察していきたい。“うそつきパラドックス”とは、

$$\text{クレタ人 (①) は言った、"クレタ人 (②) はうそつきである"} \text{ と。} \quad \dots (I)$$

という文があったとき、クレタ人はうそつきだろうか？、うそつきでないだろうか？、というものである。ある人が①が言ったことを直接聞いて、この文 (I) を述べたとしよう。文 (I) を述べた人の意識の主体を  $\alpha(\heartsuit \alpha A)$ 、 $\alpha$  がとらえるような①のクレタ人をつくる“素”を  $a_1 (\subset a_1 A)$ 、その  $a_1$  を  $\alpha$  がとらえた手段を  $\lambda_1$  とする。すると、①のクレタ人は、

$$(a_1, \alpha, \lambda_1, A) (\in A_a)$$

と表せる。ところが、②のクレタ人をとらえたのは①のクレタ人の主体である。この主体を  $a_1'$  ( $\forall a_1' A$ ) とし、 $a_1'$  がとらえたような②のクレタ人をつくる“素”を  $b(\subset bA)$  とする。 $a_1'$  が  $b$  をとらえた見方を  $\mu$  とすると、②のクレタ人は、

$$(b, a_1', \mu, A) (\in A_{a_1'})$$

と書ける。また、

クレタ人 ③はうそつきである。 … (II)

という文について、(I) を述べた人と同じ人が直接的な自らの経験に基づいて述べたとしよう。すると③は、

$$(a_2, \alpha, \lambda_2, A) (\in A_a)$$

と書ける。これと  $(a_1, \alpha, \lambda_1, A)$  は  $A_a$  の元であるが、 $(b, a_1', \mu, A)$  は  $A_{a_1'}$  の元である。このように文 (I) においては、異なる意識の元たちを扱うとすることもできると解釈されるのである。

## 参 考 文 献

- [H] M. Heidegger Sein und Zeit, 1927 存在と時間、岩波文庫
- [J] C. G. ユング ユング著作集 浜川祥枝訳 日本教文社、1970
- [K] S. Kierkegaard 不安の概念、岩波文庫
- [L] 老子道德経
- [Pe1] R. Penrose The Emperore's New Mind, Oxford, Oxford University Press, 1989
- [Pe2] R. Penrose Shadows of the Mind, Oxford, Oxford University Press, 1994
- [Pl] パイドン (プラトン I) 世界の名著 6、中央公論社
- [Sh] シャンカラ不二一元論 (バラモン経典) 世界の名著 1、中央公論社
- [Su] D. T. Suzuki, Studies in the Lankabatara Sutra, Routledge and Kegen Paul, 1968
- [U] ウパニシャッド (バラモン経典) 世界の名著 1、中央公論社
- [V] ヴェスバンドウ世親論集大乘、中央公論社
- [W] K. Wilber The Spectrum of consciousness, The Theosophical Publishing House, 1997 意識のスペクトル [I] [II]、春秋社